

在日朝鮮人文学における様相*

— 『解放新聞』(1952年9月～1953年12月)を中心に—

呉恩英**

(e-mail : decency5@hanmail.net)

<目次>

- | | |
|-------------------------|-------------------|
| 1. はじめに | |
| 2. 在日朝鮮人による組織と機関紙 | 3.1.1. 越北作家の作品 |
| 2.1. 各組織の機関紙 | 3.1.2. 在日朝鮮人作家の作品 |
| 2.2. 『解放新聞』の役割と変化 | 3.2. 詩 |
| 3. 『解放新聞』に掲載された文学に関する記事 | 3.3. その他に |
| 3.1. 連載小説 | 4. 結びに |

キーワード：在日朝鮮人文学(Literature of Korean Residents in Japan)、総連系の機関紙(bulletin of *Chongryen*)、『解放新聞』(The *Haebang Shinmun*)、越北作家(an author who went to North Korea)、民族教育(national education)

1. はじめに

在日朝鮮人文学とは、日本に居住している朝鮮人が日本語で書いたものと定義されており、研究の対象もそれを中心に行われていた。ところが、最近、日本語だけではなく、朝鮮語で書かれた雑誌をはじめ、様々な資料が見つかっている。これらの研究が進んでおり、今後在日朝鮮人文学の定義や位置づけも改めて問い

* 本研究はJSPS科研費JP15K12872の助成を受けたものです。

** 愛知淑徳大学 常勤講師 日本現代文学・在日朝鮮人文学

直す必要があるのではないかと考えられる。

本研究では、在日朝鮮人の組織、総連系と民団系の機関紙に載せられた朝鮮語で書かれた作品を紹介し、これらの組織内の文学活動の動向について考察する。本研究において在日朝鮮人機関紙に載せられた作品を研究対象にしたのは、金石範の作品を調査していたところ、総連系の機関紙に朝鮮語で書かれた幾つかの作品を見つけたからである。また機関紙には金石範だけではなく、多くの作家が活動しており、当時在日朝鮮人社会の全般的なことが分かる記事が掲載され、組織やその文学の全体像をより明確にするためには各機関紙を調査する必要があると考えたためである。

研究対象の時期は、1950年代から1960年代までにする。戦後まもなく在日朝鮮人が組織を結成して以来、民族教育を開始し、文学などに力を注いだ時期であり、1960年半ば以降は、作家たちが次第に組織を離れ始めた時期である。資料が膨大な量のため、今回は在日朝鮮人文学の全体像を捉え直すことを試みる一段階として、1952年度後半から1953年度の『解放新聞』を中心に朝鮮語で書かれた作品とその内容を紹介する。ここに載せられている作品には、朝鮮戦争や民団との争い、また民戦内での分裂の様子もうかがえるが、これに関連する記事を加えながら作品について考察していきたい。

2. 在日朝鮮人による組織と機関紙

戦後、在日朝鮮人による組織は左派と右派、すなわち、総連系と民団系と大きく二つに分かれ、それぞれの組織が結成された。民団系は、1945年11月に「在日本朝鮮建国促進青年同盟」（建青）、1946年1月に「新朝鮮建設同盟」（建同）が結成される。1946年10月に「建青」と「建同」を結合し、「在日本朝鮮人居留民団」（後に「在日本大韓民国居留民団」に変る）が結成される。民団は組織的な基盤が弱く、財政は困窮していた。組織を結成する際、親日派や反共産主義者、民族反逆

者だと言われていた人が中心的な役割を果たしており、その後、李承晩政権とそりが合わず、経済的にも韓国の支援を受けることができない状況であったため、同胞の本国に対する失望感は大きかった。¹⁾

一方、総連系では1945年10月に「在日本朝鮮人聯盟」(朝聯)が結成される。朝連は、朝鮮人の7割を結集する自主的な団体として帰国運動と民族教育活動の中心的な役割²⁾を担っていた。だが、1949年9月に米ソの対立が激しくなり、日本政府と連合軍総司令部は反共政策を推進し、朝連を強制解散させた。それを継承する形で結成されたのが1951年1月に成立した「在日朝鮮統一民主戦線」(民戦)である。民戦は、「在日朝鮮人の解放は日本の解放なくして達成できない」というスローガンを掲げて、日本共産党の前線部隊として戦後日本の革命運動の一翼を担うことになった。³⁾民戦は次第に過激な武装闘争を行ったため、支持者は急速に離れていた。

朝連は教育事業や文化事業などを積極的に行っていた。祖国の言葉、歴史、文化を取り戻し、朝鮮人としての自覚を持つように活動した。これらの事業は民戦においても続いていた。民戦が路線転換し、総連に変わる頃(1955年)から政治主義一色になっていく。こうした情勢変化は『解放新聞』(後に『朝鮮民報』に改題)に見ることができるが、その中で注目したいのは、教育や文化に関する記事が多いということである。ここに掲載された記事を読むこと、即ち読者が『解放新聞』を通して朝鮮語を学ぶこと自体が新聞として大きな役割を果たしているとも過言でない。これはまた文学者を養成する一つの過程にも繋がったとも言えよう。

2.1. 各組織の機関紙

民団と総連両組織の機関紙は戦後間もなく創刊し何回か発行停止と改題をしつつ、現在まで発行されており、それぞれ組織が支持する政府の見解や在日朝鮮人

1) 尹健次(2015)『「在日」の精神史1』岩波書店、pp. 139-146

2) 高賛侑(1996)『国際化時代の民族教育 子どもたちは虹の橋をかける』東方出版、p. 84

3) 朴一(1999)『〈在日〉という生き方』講談社、pp. 34-35

や韓国、北朝鮮の情勢などに関する記事が載せられている。文学分野において総連系の機関紙は北朝鮮の文学を中心に、民団系の機関紙は南朝鮮の文学を中心にそれぞれ紹介していた。在日朝鮮人作家の中には総連系に携わっていた人が多いが、民団系には殆ど見られない。総連系の機関紙の方が在日朝鮮人作家が活躍する機会がもっと多かったということの意味するとも言えよう。

民団系の機関紙は、総連系より発行部数が少なく、掲載されている作品数も少ない。その理由としては、組織としての力が弱かったこと、また、組織内の混乱が続き、組織が確立していないことから、機関紙にしてもその役割を充分果たせず、文学に関わる記事を掲載する余力がなかったためと考えられる。

『民主新聞』（日本語版）⁴⁾1953年7月10日付の「提言 韓国人文連の結成を望む」という記事を見ると、文化人は文学をはじめ、各分野に才能があることを示していると思われる。「提言者」は「日本に在留する韓国人の中、文化人と称せられる人は案外に多い」ことを考えると、「強力な組織力をもった文化連合会（各部門を網羅した）」が必要だという。「幾多の困難と隘路が」あるだろうが、これが「活動自身祖国文化建設に大きなプラスを意味することとなる」と提言者は述べている。民団系の方は総連系のように文学関連の記事を掲載することを望んでいたが、それを実現できる場が少なかったことが窺える。積極的に「文学」（或は「文化」）活動ができる組織を結成し、またそれを支援する余裕がない状況の中で作家を育成するのはさらに困難だっただろう。

民団系⁵⁾は、上記の機関紙以外に『신세계신문(新世界新聞)』（1948年7月～?）、『協同戦線』（在日本大韓民国居留民団 東京本部機関紙、1952年～1953年、朝鮮語）等があり、総連系は、『朝鮮総連』（後に『朝鮮時報』に改題、日本語）等がある。一部は朝鮮語で書かれたものもあるが、いずれも民団系の主機関紙は日本語で、

4) 民団系の『民主新聞』（1958年6月から1962年1月）について2018年4月に韓国日本文化学会第54回国際学術大会にて口頭発表した。詳しいことは今後他の場を借りて論じたい。

5) 『民団新聞』が発行される前に、在日本朝鮮建国促進青年同盟の機関紙として1946年3月10日から1947年3月4・7日（合併号、第62号）まで『朝鮮新聞』が発行されたが、これが現在の『民団新聞』の前身とは言えないだろう。これについてはさらなる調査が必要だと考える。

総連系は朝鮮語で書かれていた。

【総連系の新聞】

1945年10月10日～	『朝鮮民衆新聞』(旬刊、漢字・ハングル混文)
1946年3月～	『朝鮮民衆新聞』を『民衆新聞』(第14号)に改題
1946年8月15日～	『民衆新聞』と『大衆新聞』を合併し『ウリ新聞』に改題
1946年9月1日～	『ウリ新聞』から『解放新聞』に改題(隔日刊)
1947年上半年～	『解放新聞』、月刊(のちに週刊)、朝鮮語版、日本語版
1950年8月2日～	日本政府により発行停止
1951年5月～	『解放新聞』復刊、週刊、日本語版
1952年5月20日～	『解放新聞』(解放新聞社)5日刊、朝鮮語版
1953年2月3日～	『解放新聞』、3日刊(一ヵ月80円、1部10円)
1953年4月2日～	『解放新聞』(隔日刊(毎週火・木・土発行)) (一ヵ月120円、1部10円)
1957年1月1日～	『解放新聞』を『朝鮮民衆』と改題
1961年1月1日～	『朝鮮新報』(改題、朝鮮新報社)
1961年9月9日～	日刊
1966年4月2日～	週3回

【民団系の新聞】

1946年3月10日～	『朝鮮新聞』(朝鮮建国促進同盟の機関紙)
1947年3月3・7日 (合併号、第62号)	
1947年2月21日～	『民団新聞』(在日朝鮮居留民団中央総本部)
1947年10月25日	
1947年11月1日～	『民主新聞』
1962年1月22日	(在日大韓民国居留民団中央総本部機関紙)
1962年1月24日～	『韓国新聞』(韓国新聞社)
1996年4月24日	
1996年5月1日～	『民団新聞』(在日本大韓民国民団の機関紙)

本稿で民団系まで論じるには紙面上の限りがあるので、これについては別の機会にし、ここでは主に『解放新聞』に掲載されているものを中心に論じたい。ただし在日朝鮮人文学の全体象を試みるものとして少しでも理解しやすくするために、両機関紙の発行について以上の表⁶⁾を参照したい。

2.2. 『解放新聞』の役割と変化

『朝鮮民衆新聞』は、解放後初の在日朝鮮人新聞で朝連中央結成準備委員会が開催される直前の1945年10月10日に創刊された。『朝鮮民衆新聞』は1946年3月25日付の第14号から『民衆新聞』と改題され、活字による印刷が開始された。

『民衆新聞』は朝連の公式の機関紙とは銘打たれていなかったものの、朝連や日本共産党と密接な関係を有しており、実質的な機関紙となっていた。⁷⁾ 前記の表

6) 表は小林聡明の『在日朝鮮人のメディア空間』(風響社、2007年)を一部参考し、各機関紙の資料を調査しながら筆者が作成したものである。

7) 小林聡明(2007)『在日朝鮮人のメディア空間』風響社、pp. 9-10

【総連系の新聞】に記したように合併や改題を経て、1946年9月1日に『解放新聞』に改題される。1949年9月に朝連が解散されてからも1年間ほど続けて発刊された。1950年8月2日に日本政府の弾圧により発行停止になったが、1951年1月に民戦が結成され、同年5月に復刊された。1952年12月30日付の「在日同胞의 勝利를 確信—本社하와이支局長朴宗賢氏—本紙復刊에 祝賀文」、1953年4月2日付の「社説 『解新』 隔日刊을 내면서 本社々長 李心喆」という記事を見ると、復刊された当時は日本語版として発行され、またハワイにも支局があることが分かる。

『解放新聞』は復刊後、週刊から5日刊、3日刊、隔日に変わっていく。⁸⁾ 次第に発行回数が多くなったのは「三日刊發行에 際하여 全体同胞들에게 呼訴함」(1953年2月6日付)に書かれているように、財政的に余裕があったからではない。財政的に困難な状況にも拘らず、発行回数を無理に変更したのは、組織と財政を確立するためであった。経営難の一番大きな原因は、現在の発行部数にしては独立採算が取れない上、紙代と他の代金の未納が多すぎるからであると書かれている。このような状況の中で『解放新聞』を守ることは、祖国と同胞の利益に繋がることだと確信していた。『解放新聞』を守るため、解放新聞社運営委員会は次のことを支分局長と同胞に呼訴している。

- 一、紙代와 首相의 肖像画代金を 完納하는 運動을 즉시 展開하자!
- 二、読者を 한 사람이라도 더 많이 獲得하여 紙數를 倍加시키자!
- 三、民戦三全大会서 決定된 四百万円基金運動에 積極참가하자!
- 四、이 事實을 二月末日까지 반드시 完遂함으로써 解放新聞을、그리고 祖国과 同胞들의 利益을 지키자!

その後も「社説 『解新』 隔日刊を出して」(本社々長 李心喆、1953年4月2日付)、「社説 解新の危機を全体同胞と全体組織に訴える」(1953年10月3日付)、

8) 1952年5月20日から5日刊になったと書かれているが、1952年11月5日付を見ると、前回までが週刊で、11月5日付から5日刊になっている。当時、週刊とか、5日刊といっても不定期的に発行されているのが分かる。

「社説 再び解新の危機を訴える」(1953年10月20日付)等、財政難を訴える記事は続いていた。これらの共通点は「読者を増やすこと」と「紙代を払う」よう求めていることである。また組織やそれと関わっている者が傍観的であり、無関心だということを指摘しているのである。

こうした困難な状況の中で民族教育、組織、在日朝鮮人社会の強化を図っており、それに関わる記事も多数掲載されていた。「虹学んで知るために解新配布を」(1953年2月24日付)は題名のように、日本で育った投稿者は朝鮮語が分からないことに恥ずかしく思い、「祖国の統一と平和のために懸命に務めようと」、その最初の仕事として「解放新聞の配布を引き受けた」(原文は朝鮮語)という。『解放新聞』を通して祖国に対する誇りを持つようになったことを示している。

投稿者の中には女性(「祖国に裨益する心で 解放新聞を配達 北海道瀧川 一の女性」、1953年7月7日付)も少なくない。特に毎年7月頃になると「男女平等法令」の記念に合わせ「女性特集号」が発行され、女性への教育や活動に関する記事が多くなる。「男女平等」を大きく掲げ、女性に家から社会に出るように勧めていたことが分かる。このような動きは女性同盟の全盛期であった1960年代の「家庭は単なる家庭ではなく愛国的家庭(애국적 가정)」⁹⁾に繋がる前段階だということが分かる。

上記に述べた『解放新聞』が掲げた目標、即ち「読者を増や」し、組織を強化し、女性の活動を勧めるためには、何より朝鮮人に民族教育を行うことが第一であろう。その面において『解放新聞』は新聞を通して朝鮮語の勉強ができるように工夫していたことも窺える。例えば1953年7月から「秘密會議」、^{비밀 회의}「大学교수
개 편
요강을 改編」のように漢字の上にハングルでルビを付けていた。この現象は欠号が多い状況で継続とは言えないが、以降改題した『朝鮮民報』の1958年度初めから半ばごろまでにも用いられていた。これは朝鮮語がよく出来ない人に対しての工夫だとも言えよう。北朝鮮では1947年から文盲退治運動が始まり、1949年に

9) ソニア・リャン著、中西恭子(2005)『コリアン・ディアスポラ』明石書店、p. 113

言語政策の一つとして漢字を廃止しハングルのみが使われてきたが、日本に長く居住している、また朝鮮語が分らない人のために、このような表記法が用いられたと考える。こうした変化とともに『解放新聞』の記事はソ連や北朝鮮、そして在日朝鮮人等に関する記事が紙面を占めていたが、1953年3月ごろから主に北朝鮮の情勢に関する記事が多くなり始めた。

3. 『解放新聞』に掲載された文学に関する記事

総連系の機関紙には文学をはじめ、美術及び演劇等、様々な芸術分野についての記事が掲載されている。1947年2月頃、在日本朝鮮文学者協会が結成された。在日本朝鮮文学者協会は1946年初めに南朝鮮で結成された左派作家連合の朝鮮文学者同盟に「歩調を合わせ、海外において祖国民主革命に貢献する道へと大同団結し、民主文学運動に第一歩を踏み出すため」、1948年1月17日に在日朝鮮文学会と改称し、朝連傘下で芸術の大衆化を目指していた。¹⁰⁾「在日朝鮮文学会」の活動に関する記事は『朝鮮民報』（朝鮮語、1957年1月から1960年12月まで）にも続けて見られる。その反面、同年に民団の方も在日朝鮮文化団体連合会を結成していたが、民団の機関紙にはそれに関する記事は見当たらない。

文責記者による「在日朝鮮人文化運動의 一年間回顧와 새해의 展望」（1952年12月30日付、1953年1月20日付）は二回にわたって在日朝鮮人の活躍について書かれている。1951年12月に「文総」¹¹⁾を結成し、民戦に加盟した後、各部門別に育成・強化が行なわれ、具体的な運動が展開されていた。「文学分野においては主に「日本文学」として許南麒、金達寿両氏の創作活動が著しく行われ、他にも諸氏の翻訳活動も良い成果を上げた」。特に許南麒の『火繩銃の歌』『巨濟島』

10) 宋恵媛(2014)『「在日朝鮮人文学史」のために』岩波書店、pp.128-129

11) 当時在日朝鮮文学芸術家総会(文芸総)が結成されたばかりであろうか、「文総」または「文芸総」が一緒に使われていた。

等は同胞だけではなく、日本人にも影響を与えており、日本人にとってもアメリカに対し敵愾心と闘争心を呼び起こす大きな役割をしていると伝えている。今後の文化運動の目標は「文化的権利を守り、宣伝啓蒙を通して」「同胞に愛国思想を注入し」「朝日親善を図り国際的団結」をすることであり、「このような意味で昨年12月に結成された文芸総の出発に新年運動の強化と成果に大きく期待する」と書かれている。

1953年1月20日付の『解放新聞』には「朝鮮文学会」の活動が再開始されるという記事も書かれている。様々な事情によって活動が出来なかったものの、1953年1月25日に東京上野クラブで朝鮮文学会全国大会が開かれること、大会後は日本文学人との懇談会を予定していると伝え、文学人をはじめ、地方文学団体、また文学に関心がある一般人の参加を呼びかけていた。大会準備委員は許南麒、金達寿、朴元俊、李殷直、金元基氏等6人であった。

1953年2月6日付の同紙には朝鮮民主主義人民共和国で1952年1月22日に「朝鮮人民国創建五周年記念文学芸術賞」制度が内閣決定6号に制定されたと言う記事が掲載されている。この芸術賞は、毎年人民軍創建記念日に人民軍将兵の英雄的闘争の様子とその崇高な愛国性と英雄性と高い道徳的品性を表現した優秀な作品について授与される¹²⁾。詩・小説・戯曲・文学評論・音楽・絵画・彫刻・舞台芸術舞踊・芸術家・記録映画など、ジャンルが幅広く設けられている。

この文学活動は日本にも伝わり、在日朝鮮文学会では「文芸総」と解放新聞社の後援で「共和国創建五周年記念 懸賞文学作品募集」(1953年7月21日付)を行った。ジャンルは詩、小説、戯曲、ルポルタージュ、文学評論、生活記録、童話、童詩である。審査委員には、許南麒、金達寿、李殷直、南時雨など8人の在日朝鮮人作家が務めていた。文学に力を入れることは、文盲退治や朝鮮語を学ぶことにも繋がる。朝鮮語を学んだ人は一つの成果として、ものを書く機会を得られる

12) 文芸賞授与委員には、洪命熹・許貞淑・白南雲・韓雪野・李箕永・최철환・림길일・정공목・박중철・전동혁・허의で11名が審査を行う。

のである。これは出版界にも連結している。しかし、まだ読者側がこの環境に慣れていないこともあり、また、書籍や新聞を購入する余裕がなかったため、新聞社や出版社の運営は難しかったと考えられる。

こうした問題についてソンジハク(송지학)は「時評 우리말 교육 出版物에 대한 관심을 높이자」(1952年12月30日付、1953年1月20日付)という表題で三つの点を指摘している。「言語」、「教育」、「出版物」についてであるが、これらについて新しい観点から認識を高めることを強調している。一部の活動家や教員が自分の子供を日本の学校に通わせ、家で日本語を使い生活していることに対して、「思想的な大きな欠陥を持っている」と指摘し、民族教育(伝統、風習、言語)を諦めてはいけないと主張する。また、朝連の解散後、朝鮮語で書かれた出版物が見ることができなかったが、現在(1953年頃)は『解放新聞』をはじめ、色々な本が出版されている。にも拘らず、本への関心が低く、本が高いことに不満を持ち、購入する人が少ないことを指摘している。出版社側も読者の意見や提案を受入れるべきであり、民族教育、民族文化を発展させるためには出版物を大衆の中に広く浸透させなければならないとソンジハクは語っている。

3. 1. 連載小説

1952年9月から1953年12月の間に『解放新聞』に掲載された連載小説は9編である。それは北朝鮮の出身者または越北した作家任淳得、李泰俊、朴賛模、嚴興燮、崔明翊、そして在日朝鮮人作家金史良、李殷直、南時雨の作品である。小説は他のジャンル(詩、随筆等)に比べて越北(南から北へ越える)作家の割合が高いこともあり、この節では越北作家と在日朝鮮人作家に分けて作品を紹介し検討したい。

3. 1. 1. 越北作家の作品

1957年まで北朝鮮の女性文学において中枢的な役割をした作家¹³⁾とされている

13) 박경수・김순전(2009)「임순득, ‘창씨개명’과 『名付親』 - ‘이름짓기’에 의한 정체성 찾기-」『日本語文学』第41輯

イム ストック

任淳得の短編小説「趙玉姫」(挿絵-呉林俊¹⁴⁾)は1952年9月頃から1952年12月5日まで、全13回にわたって連載された。「趙玉姫」は忠誠を尽くす20代の女性趙玉姫についての物語である。時期は記されていないが、朝鮮戦争中と推察される。趙玉姫は重要な任務を担っている女性幹部で、米軍との戦闘に参戦していた。勇猛に戦っていたところ、米軍の捕虜になり、結局米軍により黄海南道海州市で処刑される。銃に打たれたときは「米帝は呪いと滅亡を受けろ！私は死ぬが私の背後には、何百万、我が労働党员がいる。民主女性がいる。人民軍がいる。きれいな国がある」「我が首領 金日成將軍万歳！」と叫んで忠誠を示している。

この作品は、当時『解放新聞』が週に一回発行されていたことを考えると、1952年9月6日から連載されたと推察される。1回から3回までの資料がない状態で明確には言えないが、趙玉姫の家族、中央党学校の卒業の時など、彼女についての説明が最後13回に詳しく記されている。挿話には趙玉姫と見られる女性と共に三人が木に縛られ、銃を向けられている様子が描かれている。女性が戦場で勇猛に戦うという物語を通して強い女性のイメージを読者に与えている。

イ テジュン

李泰俊(1904~?、江原道鐵原生まれ、1946年に越北)の短編小説「미국대사관(米国大使館)」は1953年3月3日から3月9日まで全3回にわたって連載された。射撃された飛行機から落ちたのは二人の米軍兵士である。連隊長が落下傘に乗って降りてきた米軍兵士2人を審問する。米軍の所持品の中で「自分を一番近い米国大使館または領事館に連れて行ってください」と書かれた布があった。審問後、連絡軍管が来るまでしばらくの間、何体もの死体がある火薬庫に彼らを閉じ込める。この米兵を殺さないのは「国際公法」のためである。連帯政治部通信兵は火薬庫に閉じこめられた彼らに、ここが「米国大使館だ」と言い、最後に「一九五一年

任淳得は1945年8月以降越北し、1959年以降粛清されたと言われている。

14) 任淳得の作品をはじめ、金史良、崔明翊、李殷直、朴賛模、南時雨の作品と共に載せられている挿絵はすべて呉林俊が描いたものである。呉林俊(1926~1973)は詩人、画家、評論家として1950年代から1970年初め頃まで活発に活動していた人で今後研究に値すると考える。

四巻」と日付を付けた形で物語は終わる。

チェ ミョンイク

崔明翊(1903～?、平安南道出身)の短編小説「조국의 목소리(祖国の声)」は1953年3月18日から4月7日まで全7回にわたって連載された。「私」は妻と共に北の方に避難しながら若い人民軍が戦っている様子を見守っている。妻は子供の安否が気になり、人民軍に会う度に声をかけていた。一緒に避難しているある軍官にも声をかけ、彼から自分の子供がどこかを行軍しているのではないかという話を聞いただけでも妻は少し安心する。避難者たちは順番を待ち、渡し舟に乗り川を渡る。「私」らは川を渡り進んでいたが、前から敵(「威力偵察隊」)が現れたという声が聞こえてきた。銃声が聞こえ始め、一緒に歩いていた軍官は皆に早く前に進むように言い、自分は来ていた道を引き返した。周りにいた若い人民軍たちも彼の後に従って行った。誰の命令でもないのに、自ら戦おうとしている。彼らの様子はまるで「祖国の声」を聞いてそれに応じて行動しているのではないかと「私」は思うのである。

この物語は前回の小説とは違って戦争の状況を叙情的に語っている。「원수(元帥)」という言葉は出ているものの、韓国と米国に対する直接的な批判は語られていない。「私」は若い人民軍が祖国への忠誠心(愛国心)を語っているというより、今の状況が切なく、悲しく思われるのである。

パク チャンモ

朴賛模(1950年に越北)の「꽃방처녀(花屋さんの乙女)」は1953年5月16日から1953年6月13日まで全10回になっている。日にちは現実とずれがあるが、時代背景は朝鮮戦争が起きた前後で、ソウルの麻浦区が舞台である。主人公であるチェジョンスン(최정순)は、幼い時に母が亡くなり、父は日本に出稼ぎで行ったが、その後便りがない。16歳から東洋紡績会社で働いて、8・15解放の翌年の初ストに参加し、46年秋頃に入党した。「四七年二・七救国闘争総罷業」の際、逮捕されるが、証拠が不十分だということで6ヵ月ぶりに釈放される。現在は党の指示により阿峴洞(아현동)に連絡場所として花屋を経営していた。彼女は、街頭連絡

により「祖国統一民主主義戦線中央委員会の呼訴文」をもらい、ビラを籠に入れて、楽劇団の公演が終わった後、二階からビラを撒き散らしたこともある。「六・二八」に人民軍隊が進撃してきた際、彼女はすぐ区域党に走って行って、輸送戦線の任務、「情報収集と連絡」、看護兵に次々と色々な任務を任される。最後まで壮烈に戦い戦死した一人の女性についての物語である。

ナム フソプ

嚴興燮(1906～?、忠清南道論山生まれ、1951年に越北)の短編小説「다시 넘는 고개(再び超える峠)」(挿絵、キムハンド(김한도))は1953年7月16日から同年10月13日まで全29回にわたって連載された。ユンス(윤수)が人民軍隊に入隊してから四年ぶりに故郷(北朝鮮)に帰ってきて、数日間過ごしてから戦場に戻る物語である。ユンスは新しく変わった、情愛が深く、家族愛がある故郷の町を見ながら祖国への愛国心を感じる一方、仇(敵、원수)に対する敵愾心を覚える。町の皆は「土地改革」など国からの援助を受けていることに満足し誇らしく思っている。ユンスの父は二つの勲章がある息子に対して誇らしく思う反面、自分一つもないことを恥ずかしく思う場面も見られる。この物語はユンスの故郷を背景にしながら、「首領」「祖国」「人民」のために戦い抜くことを誓う青年や故郷の人たちの姿が描かれている。ここでの敵は主に米国を示しており、「李承晩」と言う言葉は26回目に一回ほどしか使われておらず、「南朝鮮」や「南半部」という言葉も使われていない。

上記の五つの作品は北朝鮮で大活躍していた作家のものである。内容は南朝鮮と闘っているものの、その「원수(仇、敵)」は殆どが米国を示している。また忠誠心や英雄的な活動、特に女性の勇敢な行動、そして国から援助を受けている様子など、全体的に物語の人物は北朝鮮を誇らしく思っているのである。

ところが、1953年6月頃から『解放新聞』には林和、朴賛模といった作家に対する批判の記事が掲載され始めた。彼らは右傾的であり、親日的であり、カップ文学の発展を阻害し「文芸総」を破壊する人物だというのである。朴元俊(当時文芸総の書記長)は「文学部門において林和、李泰俊の影響は決して少なくなかつ

た。私たちは過去の林和の詩、評論を、李泰俊の小説を集中的に日本に紹介してきた。それは林和、李泰俊など我が朝鮮作家として一番有能で代表的な存在として認め、彼等の作品自体を高く評価したからである」。だが、現在は「反国家的で、反人民的な逆徒の文」と見なし、彼らの文を読むのを拒否すると、朴元俊は述べている（「新しい創作活動にして大衆に服務」、1953年9月8日付）。

朝鮮文学会は、文学会の組織強化と文学運動の積極的な発展を図るために、1953年9月20日に東京で臨時総会を開いた。そこで宗派主義に対する在日文学芸術人の思想闘争と共に李泰俊、金南天、朴賛模などを批判し、在日朝鮮人文芸作品に対する相互批判を展開する（「反逆者たちに対決 二〇日 文学会総会で思想闘争を展開する」、1953年9月8日付）動きもあった。以前にも林和や李泰俊等に対する批判の記事はあったが、朝鮮文学会また記事を通して在日朝鮮文学芸術家にも思想闘争を広げようとしているのである。

3.1.2. 在日朝鮮人作家の作品

キム サリヤン

金史良¹⁵⁾ (1914～？、平壤生まれ)の「従軍記 서울서 수원으로(ソウルから水原へ)」¹⁶⁾ (3回)と「従軍記 우리는 이렇게 이겼다(我らはこのように勝った)」(2回)が1952年12月10日から1953年1月15日まで全5回にわたって連載された。「従軍記 서울서 수원으로(ソウルから水原へ)」の「私」は「報道部員」として7月4日から6日、そして15日に漢江を渡り水原に突進する部隊と一緒に進行しながら戦争の状況を記している。隊員が進撃しながら、新たな街に着くたびに、子供や大人が彼らを歓迎し、住民たちは悲しさを吐露する。そこでは住民たちの犠牲や被害を受けている様子についても多く語られている。その光景を見た「私」は胸が塞が

15) 金史良の場合は内容としては越北作家の方に近いが、作家活動などを考える際、また日本からではなく、南から北へというところから今回は在日朝鮮人作家の方に入れた。

16) 1952年12月5日付に掲載された任淳得の「趙玉姫」の最終回に金史良の従軍記「海がみえる」を連載するという予告が書かれていた。

り、何故アメリカが朝鮮を爆撃しているかに疑問を持ちながら、炸裂に戦っている様子を語っている。続いて「従軍記 우리는 이렇게 이겼다(我らはこのように勝った)」にも激しい戦場の様子が詳細に記されている。最後は戦争中の陰鬱な状況でありながらも、勝利を確信し前進しているところで物語が終わる。この作品は「私」が人民軍側に属した報道部員としてというより、「人民軍」と「国防軍」、両方から距離をおいた第三者の観点から語られているものだと考える。

上記の作品は1950年9月17日に脱稿されたもので、2年後にその一部分が『解放新聞』に連載されたものである。その後、「海がみえる」というタイトルですべてが金達寿によって日本語に翻訳され、1953年『中央公論』秋季文下特集に掲載された。¹⁷⁾『中央公論』に載せられた「海がみえる」を見ると、三部に分けられている。その中で『解放新聞』に連載されたのは「第一部 従軍日記」と、「第二部 われわれはこのようにして勝った一大田攻略戦」の中の「1 錦江ラインにて」までだと推察される。¹⁸⁾

이 웅진

李殷直の作品は、短編小説「젊은 사람들(若い人たち)」と短編小説「젊음을 아까워하지(若さを惜しみなく)」(挿絵-キムハンド(김한도))の二つの作品が連載されていた。李殷直は1939年に金史良と共に第10回芥川賞予選候補に選ばれた作家である。日本大学予科在学中に月刊『芸術科』に連載していた「ながれ」(予選候補作品)は検閲により中断された¹⁹⁾とされる。

短編小説「젊은 사람들(若い人たち)」は1953年4月11日から5月14日まで13回にわたって連載された。スニ(순이)は、パチンコをやっているキムコアギル(김광길)が頻繁に家に訪ねてくることから、両親から早く彼と結婚することを促されて困っている。だが、スニはソンパルヨン(송팔용)が好きだ。彼は講習会で会った人で

17) 従軍記「海がみえる」は、「われらかく勝てり」と合わせて1952年4月に文学芸術総同盟出版社より発刊された。(安宇植(1983)『評伝 金史良』草風館、p. 252)

18) 『解放新聞』第456号から第468号が欠号になっている。

19) 1917～？、1933年来日、日本大学法文学部芸術科卒。

李殷直(2002)『「在日」民族教育の夜明け——一九四五年一〇月～四八年一〇月』高文研。

閉鎖された学校を取戻し、民族教育を守るために同胞の家を廻りながら説得していた。この様子を見てスニは彼が好きになったのである。スニは昨年から国語講習会に通い始めてから、民戦や女同の仕事も手伝うようになった。民戦の事務室で作っているビラは、ストをやっている日本港湾の労働者に送る励ましの文である。当時、日本で作られている軍需品が米軍によって朝鮮に送られていたが、朝鮮青年たちはこれを防ごうとしたのである。その方法として彼らはストをしていた港湾労働者を助けることにした。ストは労働者の勝利に終わった。だが、労働者が仕事場に戻ると、再びアメリカの軍事物資を運ぶようになったのである。

この物語には民戦のあり方の一面が見られる。また朝連が日本労働者の闘争に全力を尽くしたことから、日本共産党との関係も窺える。また在日朝鮮人であることを前面に出すように、キムコァンギルが使っている日本語がそのままハングルで表記されている。キムコァンギルのように民戦を「アカ」と思う人もいれば、民戦側の人や民団側の人を民族感情が薄弱だと批判する場面もあり、両組織が対立していることも窺える作品である。

次の短篇小説「젊음을 아낌없이(若さを惜しみなく)」は1953年10月15日から1953年11月5日まで10回にわたって連載された。「私」は冬休みの間、1951年度に中央民戦から表彰された6名の生徒が通う学校の教育事情を調査するためにK市を訪れた。「私」がソンソォンテク(송성택)に会ったのは1952年1月である。朝連の民青に携わっていたソンソォンテクはK市にある学校で20人くらいの学生を教えることになった。教育の経験がない彼は色々な工夫をしながら授業を行ってきた。授業が終わった後は、子供が民族教育を受けるように各家を廻りながら啓蒙運動をしていた。半年がすぎると、学生も増え始め、学校についての親たちの関心は高まった。その頃、朝連の時の指導者たちが「中央幹部の指導方針が間違っている」と騒ぎ立てていた。派閥闘争者たちが彼を訪ね、授業を諦めて街頭に出て非合法的なビラを撒き、チラシを貼る等の直接的な行動だけをするように脅かす。彼がこれに悩んでいた時、中央民戦で「平和月刊」を設定し全国的に平和署名を実施するようになったのである。彼は子供達と討論を重ね、子供達が祖国を

生かすのが切実なことだと自覚し、家々を回りながら署名を集めていた。これに不満を持つ「分派たち」は署名簿を破るなどして、子供達の活動を妨げる。これを見た親達は子供に朝鮮学校をやめさせ、日本学校に通わせることもあった。だが、子供たちが隣の町にまで行って署名を集めたという話が広がり、中央民戦から平和闘士として子供達と共に彼は表彰を受ける。その年に彼は兵庫県で開かれた「4・24教育事件記念大会」で教育賞を受け、 その後も民族教育運動に携わっていた。

「私」は1953年夏頃H県に中学校校舎が新築されているという話を聞いて再びソンソンテクに会いに行く。民族教育に関して色々な話をしてから東京に戻る。その次の日に「私」は彼が「やつら」に捕まり連れていかれたという話を聞く。「私」は、彼が捕まったのは民族学校を弾圧するための陰謀ではないかと考える。その後、彼からの便りはなかった。

この物語には、ソンソンテクが誰に捕まったのか、民族学校を弾圧しているのは誰なのかは明確には示されていない。また組織(民戦)内の分裂が起きている理由や問題などについても明確には語られていない。組織内に様々な問題や混乱がある中で、民族教育を守ろうとしている様子が描かれているのである。

実際に李殷直は民族教育文化事業に携わったこともあり、それに基づいて上記の二つの作品を書いたと考えられる。子供は朝鮮学校で民族教育(愛国心、朝鮮人という自覚)を学べるが、教育の環境が整えていないため、日本の中学校に入らなければならない。一方、東京まで行かせるのには大金が必要だということ等、在日朝鮮人社会における教育の実状を上記の物語を通して現わしているとも言えよう。

ところが、「젊음을 아낌없이」が連載された後、パクソン(박송)は「예술 이전의 문제 리은직 씨의 『젊음을 아낌없이』에 대하여(芸術以前の問題、李殷直さんの『若さを惜しみなく』について)」(1953年11月14日付、同年11月17日付)というタイトルの記事の中で二回にわたって李殷直を批判している。彼は李殷直の文

学に対する安逸な考え方に不満を感じるのである。「大衆を無視し」「主人公を低俗な人物に引き落とし」、「観念的に形象化しようと飛躍し、結局通俗化してしまった」。また「問題はどのように生徒の保護者と大衆を民族教育闘争に導いていくかであり、「その闘争を通して革命的に発展していくかであろう」とパクソンは述べている。

パクソンが述べたように、ソンソオンテクが結婚していない理由を「ここで育った女性はどうにも……民族感情が希薄で日本社会の軽薄な流行を追っている傾向があるためとしている。民族教育者として尽しているソンソオンテクを描こうとしたあまり、逆に男性の優越主義によって女性が卑下されたのである。しかし、切実で重要なテーマである「民主民族教育」を扱ったこの作品が通俗以下の作品であるとは言い難いのではないかと考えられる。

ナムシウ
南時雨²⁰⁾の短編小説「싸움 속에서—점순이의 이야기—(闘いの中で—ジョムスンの物語—)」²¹⁾は1953年11月7日から12月3日まで全12回になっている。18才のジョムスは自分が学校に通う権利があり、親は子供を勉強させる義務があると思っている。だが、父は子供が学校に通うことに反対にしている。

学校の友達チュンヒは宿題を提出しなかったこともあり、何回も先生に注意される。ジョムスはお昼時間にチュンヒと話す。彼女は、仕事や家事などでこれ以上耐えられないというチュンヒに、それは安逸な考えだという。二人はこの問題について「自治会」で皆と話してみることにする。「自治会」に集まった生徒の中には貧しい家庭の中で学校に通う人が多い。また子供を学校に通わせる親もいれば、無関心な親もいる。この問題をどのように乗り越えていくかについて話し合っている中で、来る「11月3日」の闘争についての話に話題が変る。ジョムスは闘いを通して学んでいくことは、また「私の明るい未来を失くさないで見出していくのは、やはり私の辛い過去に仕返しすること」だと考える。

20) 1926～2007年、慶尚北道安東郡生まれ、1940年渡日。

21) 2回から副題「ジョムスンの物語」が付いている。

この物語にも在日朝鮮人の典型的な家庭の様子とも言える、朝鮮を知らない子供、酒を飲んで喧嘩をする暴力的な父と不慣れな日本で生きていきながら全てを我慢し耐えていく母が描かれている。また生徒たちが討論する時、朝鮮語と日本語を混ぜながら交わしているが、その会話はハングルで表記されている。これは普段両言語を駆使できる或いは日本語により馴染んでいる子供世代と親世代との距離感も感じさせる部分でもある。そして当時民戦と民団との対立等、在日朝鮮人における様々な問題が孕んでいる。在日朝鮮人と関わりがある運動や労働運動について直接的な名称に触れていないが、「四・二四」は「阪神教育闘争」（1948年4月24日）を、「六・二五」は「朝鮮戦争」（1950年6月25日）を、「三・七」は「王子朝鮮人学校事件」（1951年3月7日）を思い起させる。このような状況で、生徒たちが学ぶことに強い意志を持ち、闘争のために団結している様子を作家は表そうとしたのではないかと思われる。

越北作家や金史良の作品は朝鮮半島を舞台背景にし、主に朝鮮戦争で祖国のために戦っている様子が描かれている。これと対照的に南時雨と李殷直の作品は日本を背景にしている。彼らの作品には彼らが抱えている様々な問題について描かれている。だが、少し矛盾にも見えるのは、民族教育に強い意志を見せているのに、その会話は朝鮮語と日本語と混じっており、それが両方ともハングルで表記されているのである。つまり、在日朝鮮人が日本の生活に慣れ、朝鮮人同士の間でも日本語と朝鮮語を混じり合いながら生活している様子が違和感がない、ありのままの形で現われている。

3.2. 詩

1950年代後半の『朝鮮民報』には読者をはじめ、多くの詩人の詩が載せられているが、今回取り上げている『解放新聞』には主に許南麒、南時雨、閔丙均の詩が掲載されている。許南麒²²⁾の詩は様々な記念日に合わせて4編が掲載されている。

これは当時彼の影響力と知名度が高いことを現わしていると言えよう。まず「ホ ナムギ

一九五三을 맞이하며(年一九五三을迎えて)」(1952年12月30日付)を見ると、「敵」と戦っているところ、寒さと苦難の生活に、また敵の豊かな生活への誘惑に負けないように耐えている様子が詠われている。

이 산정은/칼날같이 매운바람이/귀를 베고, /창끝같이 찬진눈까비가/가슴을 찌른다. (中略)저 산밑에 내려서 /따신 밥이 있고, /진선진미에 호의포식할 수 있다는/적들의 부르짖음을/못듣는 바가 아니다. (中略)거긴 이글이글 불이 끌는/날로가 있고, /거긴 값비싼향수와 화장품과/각종각색의 사치품이 있다는/적들의 외침이/안들리는 것이 아니다. (1952年12月30日付)

「해의 날 24回 메—데—를 맞아(太陽の日 24回메—데—를迎えて)」(1953年4月30日付)には米軍や南朝鮮などの言葉は直接触れていないが、間接的に露わにしている。全体的な流れとしてはメ—デーのことを触れている。

「생활학교 突擊月間을 맞이하여(生活学校 突擊月間을迎えて)」(1953年5月19日付)は、すぐ横に女性の活動の大事さを示す記事(「우선 배우고 알자! 그리고 團結하여 싸우자! 共和国公民의 榮譽를 위해 女同・生活学校 돌격 月間設定 三〇만맹원들 學習에 総결기」)が掲載されている。記事には祖国の発展のためには女性も学ばなければならないこと、女性の活動が活発に行われていることが書かれている。この記事のように許南麒の詩にも「女性」「金元帥への忠誠」「お母さん」という言葉が結ばれ、女性の教育が強調されている。

읽고 쓰고 배우자!(中略)예속 속에서/짓밟히고 앞눌려온/조선의 어머니 조선의 안악네 조선의 딸들이/그 욕된 굴레를 벗어나 조국이 부르는 그곳/김원수 께서 가르치시는/그 전열에 달려가 설 수 있는 단 하나의 길

(1953年5月19日付)

조선의 어머니여(中略)조선의 녀인들이여/당신들 이제껏 흘려온 눈물 /당신들

22) 1918~1988年、慶尚南道東萊郡龜浦で生まれ、1938年渡日。

이제껏 태워온 분노/그 너무도 많아서 일일이 헤아릴 수도 없는 /그 수탄 원
한과 격분의 마즈막 보복의 전선으로 돌진하라 (1953年7月23日付)

1953年7月23日付「女性特集号」には「조선의 어머니들에게(朝鮮のお母さんたちへ)」が掲載されている。「女性」「お母さん」という言葉が強調され、女性の活動が讃えられ、積極的に活動することを勧めているのである。

許南麒は朝鮮学校の教員として務めたことがあり、戯曲も書いていた。機関紙『朝鮮総連』(後に『朝鮮時報』と改題、日本語版)にも翻訳²³⁾や詩を書く等、1950年代から60年代に様々な分野で活動していた。彼は両言語で詩作をしていたが、「日本語による詩は、朝鮮のおかれている位置と境遇とをなるべく多くの日本人にわかってもらうためのもの」²⁴⁾であり、「在日朝鮮人が当面している」色々な問題を十分に訴えることはできないが、「いくらかは語りかけてくれるもの」²⁵⁾と語っている。そのため、朝鮮語に書かれた詩もそうであるが、芸術性を度外視した作品の方が多²⁶⁾という。1958年代の『朝鮮民報』に掲載されている詩にも現われているように日本語より朝鮮語で詠われた詩の方がより強烈な印象を受ける。彼は「自分の詩を翻訳するというのが、あたらしく書きなおすことと大差のないのを知り、収録するのをあきらめた」²⁷⁾と述べたように、詩の主題は同じであってもその印象は多少異なることが分かる。

ミン ヒョンギョン

閔丙均(1914～?、黄海南道新川生まれ、解放後に越北)の「어러리 벌(オロリ原)」(1953年12月8日～?)²⁸⁾は短篇小説と思われるほど、10回以上連載された長編叙事詩である。1949年頃の北朝鮮文学芸術総同盟の書記長であり、作家同盟中央

23) 朝鮮の詩を日本語に訳した『朝鮮はいま戦いのさ中にある』(三一書房、1952年)、『現代朝鮮詩選』(朝鮮文化社、1960年)等が刊行された。

24) 許南麒(1980)『許南麒の詩』同成社、p. 253

25) 許南麒(1969)「あとがき」『許南麒詩集』国文社、p. 168

26) 前掲書、許南麒(1980)p. 253

27) 前掲書、許南麒(1969)p. 168

28) 資料は12月29日付に掲載された第10回まででその後の分は確認できなかった。

委員会詩分科委員長でもある閔丙均は北朝鮮の文壇に大きな影響力を与えた詩人である。彼は解放前にも長詩を発表し、植民地期の民衆の苦痛を歌っていた。²⁹⁾

「어러리 벌(オロリ原)」は朝鮮戦争のさ中と思われる時期で、主に米国に対する憎悪や共和国に対する矜持が描かれている。その中には「私の故郷の女人たちが/大地に記録した/愛と憎悪の叙事詩を」のように女性の活動も強調されている。

上記の詩人以外にも南時雨、ホンスン Chol 等の詩が掲載されている。南時雨は、日本から解放された日を記念する「낮(顔)」(1953年8月15日付)や、誇らしき朝鮮の名前を書けるようになったことに対する嬉しい気持ちを歌う「제 이름을 적습니다(私の名前を書きます)」(1953年9月15日付)等がある。ホンスン Chol(홍순철)の「조선 인민은 하나이다(朝鮮人民は一つである)」(1953年9月8日付)は、祖国統一と北朝鮮を讃えるものである。

1950年代の朝鮮文学には、「韓雪野の長篇《大同江》、朴雄傑の短篇《上級電話手》、黄健の短篇《燃ゆる島》や、趙基天の詩《朝鮮はたたかう》、閔丙均の叙事詩《オロリ原》をはじめ」、「人民軍隊と後方人民の英雄的な闘争の姿」と「不敗の生活力を力強い語調で形象化した」³⁰⁾ 作品が多い。当時北朝鮮で発表された作品は日本にいる朝鮮人により訳し紹介された。またその作風は在日朝鮮人詩人にも影響を与え、長篇叙事詩、抒情・叙事詩を創作していたと考えられる。

3.3. その他に

『解放新聞』には定期的でないが、「文化」欄が設けられ、随筆や詩、また文化、文学に関わる記事が掲載されている。1953年頃の随筆やコントの多くは教育に関する内容である。ここでは随筆をはじめ、評論、コントを紹介しそれについて簡略に考察してみたい。

金テキョン(김태경、在日朝鮮文学会員)の随筆「해신과 국어 공부(解新と国語の勉強)」(1952年12月30日付)には「ことば」と「解放新聞」の大切さについて語ら

29) 김인섭(2010)「在北詩人 閔丙均의 光復 前 詩 研究」『우리文學研究』제30집

30) 許南麒編訳(1960)『現代朝鮮詩選』朝鮮文化社、p. 245

れている。「ハングルは私たちの民族の血と骨である」と思う「私」はある朝鮮食堂でテーブルの下に落ちていた「解放新聞」を見つけて感動した。「私」は何年ぶりにハングルで書かれた新聞を見たのである。「私」は新聞を見ながらハングルの勉強し、それを通して「朝鮮遊覧」ができ、「パルチザンの英雄」のような気持ちで文を追いかけるようになるのである。またある同胞の家に訪ね遅くまで話した時、「解放新聞」の連載小説「趙玉姫」について話すと、周りの人たちはその話で盛り上がり、新聞にも関心を持つようになった。

この随筆は『解放新聞』が1951年5月頃から日本語版として復刊され、1952年5月頃に朝鮮語で書かれたものが発刊し始めたことを考えると、まだ朝鮮人に広く知られていない状況にあり、それにハングルを読めない人も少なくないということが窺えるものである。また「解新」を通して民族に対する感情が高まり、誇りを感じるというところから、新聞としての役割を果たしているということを示していると考えられる。

リム コファンチョル

林光澈(림광철、児童文学作家)の「詩を詠むことができる指導者になれ」(1952年12月30日付)からは彼が組織と深く係わりがあり、教育者だということが分かる。文頭には朝連から民戦、民戦から総連に変わっていく過程の一面を語っている。「日本革命のために」という文末に「在日六〇万はどうすべきか!」を付き加え、まず、諸父母兄弟と自分自身を共和国民としてどうすべきかを考えてみても良い時が来た」と述べている。

「私」は文化教育のために当時日本で上映された「伯林陥落」を子供達と見に行った。子供達に解説しながら映画を見ていたが、ある場面で感動を覚えた。それはスターリンがプーシキンの詩を一節詠む場面である。以前は関心を持っていなかった場面であるが、それを見ながら「我が指導幹部と活動家の中で我が言葉で書かれた我が詩人の詩を詠む人がいるだろうか」と問いかける。民族文化に対する姿勢と理解を深めるために「我が祖国にいる指導者たちが愛する「詩」一節を新年から覚える」と決心するという内容である。

パクソン(박승)の文は上記の李殷直の作品についての批評を含め、「朝演 公演を見て」(1953年6月30日付、7月2日付)というタイトルで講演を見た感想が二回分と「随筆 有力者と論介」(1953年9月8日)が掲載されている。いずれにもその文頭または文末に所属名は記されていないが、この五つの文の内容を考えると、芸術や文学に関する仕事に携わっており、ここに使われている名前が筆名である可能性もあるのではないかと思われる。

「朝演 公演を見て」は『月』(脚本許南麒演出ジョンテユ(鄭泰裕))と『灯火』(脚本パクヨンホ(박영호)、演出ジョンテユ)を観覧して書いたものである。以前の劇に比べると、演出者と俳優は長時間練習したことや国語学習を通して民族生活感情をある程度体得したため、総括的には成功したといえる。しかし、それは主に出演者の技術的な面であり、いずれも脚本の構成に欠陥があると批判している。

「貧弱な内容で革命性だけを強調したり、革命性無しの芸術の両劇団を徘徊する傾向—これを克服しなければ我が芸術の質的向上が約束できない」と指摘し、

「革命的民族性」を強調している。

「随筆 有力者と論介」には、朝鮮学校で行っている教育は思想教育だという人がいること、米軍が爆弾を日本で製造し朝鮮に送っていること、日本に暮らしている以上、日本の法律に従うべきだという人がいることなど日本に暮らす朝鮮人の間に対立する様々な問題が生じていることが書かれている。その中には闘争や抗議をやめて「有力者」が日本と交渉すればいいという人もいる。また民族的利益と人間の基本的な権利が安逸な交渉で獲得できると思う「有力者」にもいるが、パクソンはその人たちに対して遺憾を表しているのである。

キムミン

金民のコント「夫婦喧嘩」は1953年7月23日付女性特集号に掲載されたものである。これは金鶴泳や李恢成の作品で出てくる家庭を思い起こさせる一つの小説を短く凝縮したものとも言えよう。妻は仕事が終わると、家に帰って家事を終え、生活学校(講習所)に通う。青い痣が付いた顔で先生の話に耳を澄ます。家に遅く帰ると、皮革工場で働いている夫が怒って待っている。妻が遅くまで「国語」を

勉強することに対して、浮気でもするのではないかと夫は不満を持ち、妻に暴力を振るう。これを見た子供達は泣きだす。夫(文書房)は妻に女は学ぶ必要はないといい、これに妻は反発する。妻に対しての夫の怒りは賃金を貰った日はましである。妻の泣き声を聞いて隣家の婦人が訪ね、「文書房」にどうして夫たちは妻を殴るか、賃金をくれない工場ではどうして拳骨を振るわないのか、と詰る。これに対して何も言えない「文書房」は泣いている妻に誤り、子供を寝かす。

このコントは「社説 男女平等権法令七周年記念日を控えて」や許南麒の「朝鮮のお母さんたちに」などのように男女平等を始め、女性の活躍を期待する文が紙面を埋め尽くしている中で載せられているものである。一見、このコントはそれに反するような内容にも見える。だが、勉強し難い環境で「国語」を学んでいる妻に暴力を振るう夫に批判の声を挙げようという意図が孕んでいるとも言えよう。当時の「男女平等」を掲げていることを考えると、男尊女卑的な考え方³¹⁾が強い夫(男性)に向って醒覚し妻に協力すべきだということを勧めているのである。いずれにしても在日朝鮮人社会の現実をありのままで見せてくれるコントである。

金民は1961年頃に許南麒、南時雨、柳碧と共に朝鮮作家同盟の盟員であり、在日朝鮮文学芸術家同盟の盟員であった。彼の文は『解放新聞』と『朝鮮民報』(朝鮮語版)より『朝鮮総連』と『朝鮮時報』(日本語版)に多く掲載されている。また小説より上記のように主に随筆や書評、そして朝鮮の文化、文学を紹介していた。金民は1960年代に活発に活動していた作家として今後注目すべき一作家だと考える。

4. 結びに

総連系の機関紙には今まで注目されていなかった作家や作品が多く載せられており、当時の朝鮮人の状況が分かる大事な資料だと考える。また現在、在日朝鮮

31) 宋恵媛はこの「夫婦喧嘩」について「女性たちの「文盲退治」は朝鮮の前近代的封建遺習や日本帝国主義といった観念的なものでなく、最も身近な男性である朝鮮人の夫との日々具体的な闘いでもあったのだ」と述べている。(前掲書、宋恵媛(2014)p. 64)

人文学と呼ばれるまでの過程を窺い知ることができる。特に『解放新聞』には越北作家の作品が掲載され、また(北)朝鮮文学や文化も紹介され、それが在日朝鮮人に多く影響を与えたことが窺える。その意味として『解放新聞』及びそれ以降の機関紙について研究する意義は大きいと考える。今回は在日朝鮮人文学の全体像を捉え直す一段階として『解放新聞』(1952年9月から1953年12月)に掲載された作家や作品を中心に紹介しそれについて検討及び考察を行った。

1953年度前後の『解放新聞』は当時の北朝鮮、日本、総連の情勢を始め、文学や文化に対する記事が多く、文化面にも力を入れていたことが分かる。これは詩や小説の連載等が紙面を占める割合が非常に少なかった民団系の機関紙(『民主新聞』)と比べると、朝鮮語教育や文学、文化に対する関心と意志が強く、在日朝鮮人作家が養成される環境が整っていたと言えよう。また『解放新聞』の社会面において男女平等というスローガンの下に女性の活動を支援するように促す動きも見られる。

こうした現象は作品にも現われる。越北作家、特に任淳得の「趙玉姫」、朴賛模の「花屋さんの乙女」には女性を主人公にして祖国のために勇敢に戦っている様子が描かれている。在日朝鮮人作家南時雨の「闘いの中で—ジョムスの物語—」等、小説をはじめ、詩、随筆にも女性が積極的に祖国、組織のために闘う様子が表れ、女性が浮彫りになっている。他にも朝鮮戦争や民団との闘い、民戦内の分裂、また民族教育に取り組んでいる朝鮮人の様子も生き生きと描写されている。

『解放新聞』において、詩、随筆、小説等、様々な分野において越北作家及び在日朝鮮人作家が活動できたのは北朝鮮の文盲退治(1947年)や言語政策(1949年)が行なわれていたからだと考えられる。それが日本にいる朝鮮人にも大きく影響を与え、こうした動きにより現在の在日朝鮮人文学が成立したのである。その過程で『解放新聞』は大きな役割を果たしていたと言えよう。

【参考文献】

〔原資料〕

『解放新聞』（朝鮮語版）、『民団新聞』（日本語版）、『民主新聞』（日本語版）

〔作品集・研究論文等〕

安宇植(1983)『評伝 金史良』草風館、p. 252

李殷直(2002)『「在日」民族教育の夜明け』高文研

尹健次(2002)『「在日」の精神史1』岩波書店、pp. 139-146

小林聡明(2007)『在日朝鮮人のメディア空間』風響社

高賛侑(1996)『国際化時代の民族教育 子どもたちは虹の橋をかける』東方出版、p. 84

ソニア・リャン著、中西恭子(2005)『コリアン・ディアスポラ』明石書店、p. 113

宋恵媛(2014)『「在日朝鮮人文学史」のために』岩波書店、p. 64、pp. 128-129

朴一(1999)『〈在日〉という生き方』講談社、pp. 34-35

許南麒編訳(1960)『現代朝鮮詩選』朝鮮文化社、p. 245

許南麒(1969)「あとがき」『許南麒詩集』国文社、p. 168

許南麒(1980)『許南麒の詩』同成社、p. 253

김인섭(2010)「在北詩人 閔丙均의 光復 前 詩 研究」『우리文學研究』제30집

박경수·김순진(2009)「임순득, ‘창씨개명’과 『名付親』— ‘이름짓기’에 의한 정체성 찾기—」『日本語文学』第41輯

논문 투고 일자 : 2018. 06.24.

논문 심사 일자 : 2018. 07.31.

게재 확정 일자 : 2018. 08.03.

 <要旨>

 在日朝鮮人文学における様相
 — 『解放新聞』(1952年9月～1953年12月)を中心に—

呉恩英

総連系の『解放新聞』には民団系の機関紙より朝鮮語教育や文学・文化に対する関心と意志が強く、在日朝鮮人作家が養成される環境になっていたと言えよう。総連系の機関紙『解放新聞』(1952年9月から1953年12月)には越北作家と在日朝鮮人作家の作品が連載されていた。当時の『解放新聞』には朝鮮半島と日本の情勢を始め、文化面に対する記事が紙面を占める割合が高かった。これは民団系の機関紙に比べると、文化面にかなり力を入れていることが分かる。

『解放新聞』の社会面においては男女平等というスローガンの下に女性の活動を支援するように促す動きも見られる。こうした現象は作品にも窺える。越北作家や在日朝鮮人作家の作品等、小説を始め、詩、随筆にも女性を主人公にして彼女らが積極的に祖国、組織のために闘っている様子が描かれている。また民戦内の分裂や民族教育に取り組んでいる朝鮮人の様子も描かれている。

『解放新聞』に詩、随筆、小説等、色々な分野において越北作家及び在日朝鮮人作家が活動できたのは、北朝鮮で行なわれていた言語政策があったからであり、それが日本にいる朝鮮人にも大きく影響を与えたと考えられる。またこれは現在の在日朝鮮人文学にもなっており、その過程の中で『解放新聞』は大きい役割を果たしていたと言えよう。

Literature of Korean Residents in Japan:

An Analysis of *Haebang Shinmun* from September 1952 to December 1953

Oh, Eun-Young

Haebang Shinmun (September 1952 to December 1953), a bulletin of *Chongryon*[総連], serialized the works of Koreans who moved to North Korea from South Korea and who resided in Japan. Compared to the bulletins of *Mindan*[民団], *Haebang Shinmun* paid more attention to Korean language education, literature, and culture, which provided the conditions necessary for the growth of Korean novelists residing in Japan. At the time, this bulletin had a high ratio of articles on cultures, especially those of the Korean peninsula and Japan. This means that it emphasized cultural aspects more than the bulletins of *Mindan* did. There were social articles that encouraged the support of women's activities under the slogan of gender equality.

Such ideas appeared in literary works in the bulletin. Female main characters actively fighting for their country and organization were depicted in the novels, poems, and essays written by Koreans who moved to North Korea and Korean residents in Japan. They also depicted a divide between *Minjeon*[民戦] and Koreans who committed themselves to national education.

The Koreans who moved to the north and Korean residents in Japan enjoying great success in the fields of poetry, essays, and novels; in the backdrop of this was North Korea's literacy education and language policy. It seems that the movements in North Korea greatly affected Koreans in Japan. This influence led to the growth of contemporary literature of Korean residents in Japan, and *Haebang Shinmun* played a big role in that process.